彦松。　はゝあ、お寺まゐりかね。

長九郎。　きのふは六月の十三日、死んだ女房の三回忌にあたるので、墓まゐりに行つて遣りたいと思つてゐると、つい眼と鼻の山崎ではあの通りの大戰ひで、流れ丸がとんで來るやら、落武者が逃げ込むやら。うか〳〵と外へ出て飛んだ災難をうけてはならぬと、家のなかにみんな小さくなつてゐましたので、一日おくれて今日の墓まゐり、土の下にゐる女房にもよくその斷りを云つて來ました。

重助。　それはおかみさんもさぞ喜びなすつたらう。かんがへて見ると早いもので、亡つたおかみさんももう三年になりますかね。

（この中、おくろとおかんは床几をまへに持出して、長九郎等に掛けろといふ。三人は會釋して床几に腰をかける。）

丑五郎。　だが、まあ、おいね坊にも七之助さんといふ立派な婿どのが出來て、かうして三人が仲よく揃つて御參詣に行つてやれば、死んだおかみさんもどんなに喜ぶか知れやあしない。

彦松。　ほんたうに長九郎さんの家でも良い婿を取りあてゝ仕合せだと、近所でもみんな羨んでゐますよ。

長九郎。（嬉しげに。）はい、はい。人樣のまへで自分の家の婿を譽めるのも異なものでござりますが、まつたくこの七之助はみなさんも御存じの正直者で、朝から晩まで畑仕事には精をだし、年を取つたわたくしには孝行を盡してくれます。

おくろ。　それにおいねさんと夫婦仲のむつまじいのが第一の親孝行といふものでございますよ。

（七之助とおいねは顔を見あはせて恥しさうに俯向く。）

重助。　それにつけても、あの長兵衛さんがもう少しどうにかなつてくれたら。

おくろ。　これ。（眼で制する。）

（重助も氣がついて口をつぐむ。丑五郎と彦松も眼を見あはせて氣の毒さうに默つてゐる。）

長九郎。（嘆息する。）まつたくこゝの御亭主のいふ通り、あの長兵衛めは自分の生みの忰ながらも、愛想の盡きた役雜もので、博奕は打つ。酒はのむ。おまけに子供の時からの喧嘩好きで、なにかと云へばすぐに腕づくで暴れ散らすといふ。それは、それは、箸にも棒にもかゝらぬ奴、幾たびか勘當しようとは思ひながらも、やつぱり肉身の恩愛で、けふまで堪忍してゐますが、あいつの噂が出るたびに、つながる緣の妹や婿どのにも、肩身のせまい思ひをさせますのが、ほんに氣の毒でござります。

丑五郎。　どこの息子もそれが多いが、長兵衛さんは少し念が入り過ぎてゐるやうだ。さうして今日のお墓まゐりにも、長兵衛さんは一緒に出ては來なさらないのだね。

長九郎。　なんの、なんの、きのふの朝から家を出たぎりで、どこをうろ附いてゐることやら、今まで姿を見せませぬ。あんな奴のことなれば、自分の母親の祥月も命日も大方忘れてゐませうよ。

彦松。　そんなことかも知れないな。（丑五郎と顔を見あはせる。）なんにしても困つた男だ。

七之助。　今度の軍がはじまると、おれもこのどさくさまぎれに金儲けをするのだと云つて、竹槍を持つて出たまゝで、今に戻つて來ませぬので、もしやなにかの間違ひでもありはしまいかと、わたくし共も案じてをります。

重助。　なに、竹槍を持つて出た……。それはなるほど不安心だ。

おいね。　大方野武士の仲間入りをして、落武者の鎧や刀でも剝ぎ取るつもりでございませうが、相手は侍、こつちは百姓、もし仕損じたら大變と、七之助さんもわたくしも昨日から胸を痛めてをります。

長九郎。　いや、いや、あんな不孝者は、いつそ流れ丸にでも中つて死んでしまふ方が、世間の若い人達のよい見せしめでございます。

おくろ。　なるほど、無い子には泣かないといふが、あんな息子を持つた長九郎さんは、ほんたうにお察し申しますよ。

（下の方より馬士彌太八出づ。）

彌太八。　おゝ、長九郎さん、こゝにゐなすつたか。丁度いゝ所で逢ひましたよ。

長九郎。　おゝ、彌太八さん。わたしに何ぞ用でもありますかえ。

彌太八。　用といふのは外でもねえ。おまへさんには些と氣の毒だが、あの蝮野郎がね。

長九郎。　え、枠がどうかしましたか。

彌太八。　蝮野郎の長兵衛がおれの家の馬を盗んだのだ。（大きな聲で云ふ。）

おいね。　そんなら兄さんがお前の馬を……。

七之助。　して、それはいつの事でございます。

彌太八。　今から五日まへの晩に、おれの馬小屋へ忍び込んで、大切の栗毛をぬすみ出した奴がある。あれを盗まれては其日の商賣も出來ねえので、毎日方々をさがしてゐると、今日になつてやう〳〵その手がかりが付いた。二三日前におれの栗毛を引張つて、隣村の源右衛門のと

ころへ賣りに行つた男、それがあの蝮の長兵衛に相違ねえのだ。

七之助。　はて、二口目には蝮々と、大きい聲で云つてくださるな。そんなら長兵衛どのが、お前の馬をひき出して、隣村へ賣りに行きましたか。

彌太八。　さうだ、さうだ。ひとの飼馬を斷りなしに牽き出して、よそへ賣つてしまつたからは、云はずと知れた馬どろばうだ。その掛合にゆく途中で、こゝでお前方に逢つたのが丁度幸ひだ。さあ、おやぢさんも婿どんもこの始末をどうしてくれる。（詰めよる。）

七之助。　（起ち上りて遮る。）まあ、待つてくだされ。なるほどお前の方には確かな證據もあらうけれど、なにをいふにも相手の長兵衛どのは、きのふの朝からゆくへが知れぬので、わたし達も心配してゐる所。ともかくも當人が戻つて來た上で、その實否をよく聞きたゞして……

彌太八。　では、おれが根もないことをこしらへて、云ひがかりでもすると云ふのか。

七之助。　いや、さういふわけでは決してござらぬが、くどくも云ふ通り、その相手の長兵衛どのが留守であれば……。

彌太八。　あんな役雜者は初めから相手にしねえ。おれはお前方を相手にして、なんとか埒をあけて貰ふつもりだ。さあ、馬をかへすか、それだけの金を拂ふか、二つに一つの挨拶をして貰はう。（七之助の腕をつかむ。）

おいね。　（遮る。）それだと云つて、今すぐには……。まあともかくも、二三日のところを……。

彌太八。　（おいねを突きのける。）え、、二三日は扨措いて、もう一日も待たれねえのだ。

長九郎。　（起ちあがる。）はて、手荒なことをさつしやるな。おまへの理窟はよく判りました。あらためて本人を詮議するまでもなく、その馬は屹と長兵衛めが盗み出したに相違ござるまい。あんな悖を持つたが親の因果、たとひ田畑を賣り拂つてもかならずお前に損をかけますまいから、勘辨しにくい所でもあらうが、わたくしに免じてもう二三日、どうぞ待つてくださるまいか。

七之助。　わたしも共々にたのみます。

重　助。　ふだんから村中でも正直者と評判のおやぢさんと婿さんが、かうして賴みなさるのだから、お前もおとなしく料簡して、まあ二三日待つて遣ることにしたらどうだね。

丑五郎。　さうだ、さうだ。決しておまへに損をかけるやうな長九郎さんではない。

彦　松。　今日のところは我慢しろ、我慢しろ。

彌太八。　（澁々うなづく。）みんながそれほどに云ふものを、おれ一人がじや〳〵張るわけにも行くめ

え。ほんたうに忌々しいのは馬どろぼうの長兵衛めだ。おれはこれから隣村へ行つて、果もかくもあの馬を取戻して來なければならねえ。では、おやぢさん。また逢はうぜ。

（彌太八は上の方に去る。）

長九郎。　なんと云はれても一言ござらぬ。ほんに憎いのは馬どろぼうの長兵衛めでござります。

（皆々も氣の毒さうに默つてゐる。上のかたより庄屋與茂作、僧法善と連れ立ちて出づ。）

與茂作。　おゝ、皆の衆もこゝにゐたか。

重　助。　おゝ、庄屋樣。お暑いことでございます。

（皆々會釋する。）

長九郎。　（進み出づ。）庄屋樣。こゝらの軍も靜まりましてまづ〳〵結構でござりました。和尚樣。先刻は御邪魔をいたしました。

（七之助もおいれも會釋する。）

法　善。　こなた衆はあれからこゝにござつたのか。

七之助。　はい。あの、少し面倒なことが出來まして……。

法　善。　ほう、なにか知らぬがそれはお氣の毒ぢやな。

（丑五郎と彦松は起つて床几をゆづれば、與茂作と法善は腰をかける。）

與茂作。　さて、こゝにあつまつてゐる人達にも、話して置きたいことがある。と云ふのは、今度のいくさに限らず、近ごろは村々の百姓どもの氣が暴くなつて、やゝともすれば竹槍や鐵砲などをかつぎ出して、落武者の鎧兜などを剝ぎ取らうとするのは、以てのほかのことだ。百姓は鋤や鍬を持つて、耕作を精出すのがめい〳〵の務で、猪狩の時のほかには、竹槍や鐵砲などをむやみに持出す筈のものではない。その道理をわきまへずに、この頃の若い百姓どもは、兎かくに亂暴で慾張りで、野武士や強盜の眞似をしたがるのは、言語道斷の不埒とあつて、羽柴筑前守殿から唯つた今きびしい御觸れがまはつて來た。今度のいくさに就いても、右樣の不埒者は強盜と同罪、一々に搦め取つて磔の刑に行ふとある。

重　助。　おゝ、磔……。

（皆々おどろく。）

法　善。　この村の人達は皆おとなしい正直者、そんな不心得の御仁は一人もあるまいと、わしも安心してゐますが、それでもまた大勢のうちには……。（長九郎を見る。）どんな人間がどんな出來心で、どんな事を仕出來すまいものでもない。萬一そんなことがあつたら、本人は勿

論、村中の者も又どんな迷惑を受けまいものでもござらぬ。ぢやによつて、誰も彼も氣をつけて、かならず野武士のやうな眞似をしてはなりませぬぞ。よいかな。

一同。　はい、はい。判りましてございます。

（この以前より獵夫傳藏、火繩筒を持ちて下のかたより出で、庄屋と僧との話を聽きゐたりしが、大勢をかき分けて進み出づ。）

傳藏。　もし、庄屋樣、和尙樣。どうも飛んだことを致しました。（鐵砲をまへに置きて、土に手をつく。）

與茂作。　飛んだことゝは……。

傳藏。　實はこの鐵砲をかつぎ出しまして……。（泣く。）どうも大變なことになつてしまひました。

與茂作。　むゝ。では、その鐵砲で……。（撃つ眞似をする。）遣つたか、遣つたか。

傳藏。　（おなじく撃つ眞似をする。）やりましてございます。

法善。　その相手はやはり明智方の落武者かな。

傳藏。　はい。立派な鎧を着てゐましたので、つい、ふつと出來心で、遠くから一發撃ちましたが、猪や猿をうつのとは違ひまして、人間を撃つのは生れてから初度なので、何だかぶる〳〵と手がふるへて、たうとう撃ち損じてしまひました。

丑五郎。　むゝ。撃ち損じて、それからどうした。

傳藏。　どうも斯うもない。なにをいふにも相手は立派な侍、見つけられたら命懸けと、あとをも見ないで一目散に逃げて來た。

彦松。　いや、弱い男だ。

與茂作。　いや、弱くつて仕合はせだ。もしその落武者を首尾よくずどんと撃ち留めて、その鎧でもはぎ取つたが最後、おまへはすぐに繩にかゝつて、京の町々を引廻しの上に磔だ。いや、考へてもおそろしい。（身を顫はせる。）

法善。　南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。（珠數を爪繰る。）

傳藏。　まつたく怖ろしいことでございます。（泣く。）就きましては庄屋樣にも和尙樣にもわたくしが一生のお願ひ、どうか此事は御内分になすつてくださいまし。御承知の通りわたくしには、女のくせに毎晩寢酒を一升づつ飲む女房もございます。泣くと食はうのほかには何の能もない子供も六人ございます。萬一わたくしがそんなお仕置にでもなりますと、その女房や子供がみんな路頭に迷はねばなりません。もし庄屋樣……和尙樣……。お察しなす

つて下さいまし。お助けなすつてくださいまし。もし、この通りでございます。

（傳藏は泣きながら手をあはせる。）

重　助。　正直者の傳藏さんがどうしてそんな氣になつたか。これも不斷から猪や猿を殺した、殺生の報かもしれない。

おくろ。　それにしても鐵砲一つ擊つたために、引廻しのうへに磔とは……。

おかん。　あんまり悲しい酷たらしい。

（重助、おくろ、おかんの三人は聲をあげて泣く。）

與茂作。　まあ、待つた、待つた。そんなに泣いて騒ぐことはない。これ、傳藏。

傳　藏。　はい、はい。お助けなすつて下さいまし。

與茂作。　それだから助けてやる。なるほど落武者を狙つたといふのは、貴樣が重々惡い。しかし相手を殺したといふわけでもなし、物を取つたといふ譯でも無し、貴樣は狩夫で鐵砲をうつのが商賣、人間を猪と間違へて、ついうつかりと引金を外したゞけのことだ。

法　善。　左樣でござる。さうして見れば傳藏どのに罪はござらぬ。

傳　藏。　では、お助けくださいますか。

與茂作。　お、助けてやります。皆の衆も聞く通りの次第だから、どうぞ内分にたのみますぞ。

傳　藏。　（一同に。）どうぞ御内分に願ひます。これでわたくしも生き返りました。ありがたうございます。有難うございます。

（傳藏は土に額をすり付けて、庄屋と僧とに幾たびか禮をいふ。この時、向ふにて女の叫ぶ聲。）

小　鈴。　あれ、あれ。なにをしなさるのぢや。あれ、あれ……。

（向ふより小栗栖村の長兵衛、二十七八歳、村一番のあばれ者、少し醉つてゐる體にて、片手に穂さきを切られたる竹槍をかつぎ、片手に小鈴の手をとりて出づ。小鈴は十七八歳の美しき巫女、狩衣に緋の切袴をはきて、手には榊の枝を持つ。長九郎はこれを見て、惡い奴が來たといふこゝろにて、七之助にさゝやき、自分だけは店の暖簾口に入る。）

長兵衛。　はて、いゝから一緒に來いといふのに……。遠くまで行くのぢやあねえ。あの立場茶屋まで來て酌を一杯してくれゝば可いのだ。別に面倒なことを頼むのぢやあねえ。さあ、早く來てくれ。

（忌がる小鈴の手をひきて、無理無體に茶屋の前に引摺つてくる。これを見て、一同はたち上る。）

おいね。　おゝ、兄さん。

七之助。　どうなすつたのでござります。

長兵衛。　どうするものか。このお巫女に酌をして貰はうと思つて連れて來たのだ。

おいね。　お、、おまへは八幡樣のお巫女さん。どうして兄さんに連れられて……。

小鈴。　今そこで長兵衛どのに行き逢ひましたら、わたしに酌をしてくれと云つて、忌がるものを手籠めにして……。

おいね。　又いつもの惡い癖が始まりましたか。人もあらうにお巫女さんを手籠めにして連れて來るとは……。

七之助。　あまりと云へばあまりの無體、もうそんなことはおやめなされませ。

長兵衛。　なにを云やあがる、默つてゐろ。おい、亭主。べらぼうに暑いな。その床几を風通しの好いところへ出してくれ。

重助。　はい、はい。

（重助はよんどころなしに床几を直せば、長兵衛は小鈴の手を取りしまゝ床几に腰をかける。）

長兵衛。　なんでも好いから酒と肴を持つて來てくれ。明智の落武者とは違ふから、おれは食倒しや飲倒しはしねえ。まあ、安心してどし〳〵持出してくれ。

おくろ。　長兵衛さん。大層御機嫌のやうですが、なにか好いことでもありましたかえ。

長兵衛。　好い事どころか、あんまり馬鹿馬鹿しいので自棄酒だ。やけになるのも無理はあるめえ、まあ聽いてくれ。明智日向守光秀、羽柴筑前守秀吉、この二人が山崎で天下分目の合戰。その大博奕のなかへ割り込んで、おれの名前のちやゝと出るか、半と出るか、うまい金儲けをしようと思つて、朝からそこらをうろ付いて、いくさの樣子を見てゐると、明智方はいや散々の大敗北。そのうちに日はくれる、空は雨催ひ、これはおあつらへの稼ぎ時だと村はづれの竹藪にもぐり込んで、藪つ蚊に食はれながら待つてゐたところが……。いやもう型無しの番狂はせよ。それでもこつちは白痴未練で、たうとう夜あかしをした上に、そこらに手負や討死でも轉がつてゐたら、明智方でも羽柴方でも頓着はねえ。見つけ次第に鎧でも太刀でも剝ぎ取つて、きのふからの立前にして遣らうと、この暑いのに汗みづくになつて、二里三里のあひだを駈けまはつたが、この頃はだん〳〵に世が惡くなつたので、勝つた方でも負けた方でも如才はねえ、誰がどう始末してしまふのか知らねえが、槍一本だつて滿足なものは落ちてゐねえ。これがほんたうの骨折損のくたびれ儲けで、暑さは暑し、眠くはなる。足は重くなる。腹は空る。もうがつかりして歸つてくると、丁度そこで

この美しいお巫女さんに出逢つたから、無理にたのんで一緒に來て貰つたのだ。どうだ、亭主。かう事が判つたら、晝間の木兎のやうに眼をぱちくりさせてゐることもあるめえ。

小栗栖の長兵衛源のなにがしの御指圖にしたがつて、酒を持つて來い。肴も持つて來い。

重助。　はい、はい。でも、おまへはもう醉つてゐるやうな。

長兵衛。　あんまり忌々しいから、途中で一杯引つかけて來たが、そんなことでは蟲が納まらねえ。さあ、早くしろ。ぐづ〳〵してゐると、この竹槍で土手つ腹をお見舞ひ申すぞ。（竹槍を投げ出す。）

重助。　（おどろいて飛び退く。）はい、はい。唯今すぐに……。

（重助はおくろと顔を見あはせて、二人は奥の暖簾口に入る。）

小鈴。　あの、わたしは……。

（小鈴は起ちかゝるを、長兵衛は押へる。）

長兵衛。　え、、逃げてはいけねえ。お神樂に出る八股の大蛇のやうに、取つて喫はうといふのではねえ。たゞ酒の相手をして貰へばいゝのだ。

（一同は呆れてながめてゐる。與茂作は見かねて進み出づ。）

與茂作。　これ、これ、長兵衛どの。自棄酒を飲むと飲まぬとはおまへの勝手だが、神樣につかへる巫女どのを捉へて、酒の酌をしろなどとは、あんまり穩かであるまいぞ。酒の相手がほしければ、そこにゐるおかん坊に酌をして貰ひなさい。第一にそんな竹槍などを擔ぎまはつて、落武者を剝ぐの、金儲けをするのと、大きな聲で呶鳴つてはならないぞ。

長兵衛。　子供のときから野良へ出て、大きな聲で猪を逐ふ癖が附いてゐるので、それが地聲になつてしまつたのだから仕方がねえ。大きな聲で呶鳴つては惡うございますかえ。

與茂作。　その大きな聲も事による。今も云つて聞かせた通り、落武者の鎧をはぐの、太刀を取るのと、そんなことを無暗に呶鳴つてゐると、おまへの命にかゝはるのだ。

法善。　長兵衛どのはまだ知るまいが、羽柴筑前守どのから御觸れが出て、野武士の眞似などをする百姓は一々に召捕つて磔にかけるといふ、嚴しい御沙汰ぢや。

長兵衛。　それはほんたうかえ。馬鹿なこともあるものだ。自分たちは勝手に人殺しや分捕功名を遣つてゐながら、おれ達がうつかりしたことをすれば、すぐに磔……。あんまり手前勝手にも程がある。おれはそんな御觸は肯かねえ。忌だ、忌だ。

七之助。　たとひ肯かうと肯くまいと、それが世にいふ泣く子と地頭で、上の御沙汰ならば是非がご

ざりますまい。

おいね。　そんなことがお侍衆の耳へでもきこえたらば猶々罪の重る道理、なんでもおとなしくしてゐるに限りまする。

長兵衛。　やかましい。なんぞと云ふと利口振つてつべこべとうるさく口を出す奴等だ。（奥にむかつて呼ぶ。）おい、おい、なにをしてゐるのだ。早く酒を持つて來い。

おいね。　それにしても、このお巫女さんを……。（おいねは二人のあひだに入りて、小鈴を引放さうとすれば、長兵衛はおいねを突き倒す。七之助とおかんはあわてゝおいねを介抱する。）

長兵衛。　え、、幾度云つてもわからねえ奴等だ。阿兄さんにむかつて意見がましいことなんぞ云やあがると、ひきがへるのやうに踏み殺すぞ。

（奥より重助とおくろは、酒と肴とを運び出で、床几の端におく。）

おくろ。　お待遠でございました。

長兵衛。　こゝの家の酒はあんまりよくねえが、おなじ村の好みに飲みに來てやるのだ。ありがたく思ふが可い。（茶碗を取る。）さあ、酌をしてくれ。

おくろ。　はい、はい。

長兵衛。　え、、お前のやうな南瓜ではいけねえ。おれは唐瓜のやうに色の白いお巫女さんに頼んでゐるのだ。（小鈴に。）おい、笑ひ顔をして機嫌よく酌をしてくれ。

小鈴。　わたしにそんなことは出來ませぬ。どうぞ免してくださりませ。（榊を把り直して顔をそむけてゐる。）

長兵衛。　なに、酌は出來ねえ。別にむづかしいことではねえ、手のある人間なら誰にでも出來ることだ。一體そんなものを大事さうにさゝげてゐるから、肝腎の手が塞がつてしまふのだ。（長兵衛は小鈴の手より榊を引つたくりて地に投げ付ける。）

與茂作。　や、清浄の御榊を……。

（人々も呆れる。長九郎は奥よりうかゞひ出で、堪へ兼れて前に出ようとするを、七之助とおいねが制して、無理に奥へ押込む。）

長兵衛。　（冷笑ふ。）なにが御榊だ。こんなものはどうでも構はねえ。（足にて榊を踏みにじる。）さあ、手が明いたら酌をしてくれ。（酒壺を小鈴に突きつける。）

法善。　これ、これ。長兵衛殿。それはあんまりの亂暴狼藉といふものぢや。庄屋様も云はれた通

り、酌をして貰ひたければこゝの娘にたのむがよい。神に仕へる者や、佛につかへるものを、唯の人とおなじやうに思うてはならぬ。もうよい加減にさつしやれ。

長兵衛。なに、神に仕へる者や佛につかへるものを、唯の人と思ふなと……。へん、乙う我田へ水を引くな。佛につかへる乞食坊主なんぞには初めから用はねえ。西瓜頭をかゝへて引込んでゐろ。

法善。さりとは餘りに度しがたい人物ぢや。現にきのふはこなたが母御の三回忌といふに、朝から家を飛び出したまゝで、けふの墓參りにもこなた一人が缺けてゐるではないか。

長兵衛。きのふは阿袋の三回忌……。成程そんなことかも知れねえが、おれの代りに此奴等が……（七之助とおいれを指さす。）殊勝らしく拜みに行けば、それで可いのだ。おかけで和尚も幾らかの御布施にありついたらう。はゝ、うまく遣つたな。

法善。これは怪しからぬ。わしは御布施のことなどを云うてゐるのではござらぬ。おまへの不孝を叱つてゐるのぢや。

長兵衛。そんな御説教はそこらにゐるおめてたい人間どもに聽かしてくれ。それよりも酒のさかなに、その坊主頭に鉢巻でもして、景氣よく一番踊つてくれ。おれのやうな亡者には、その方がよつほど功德になる。さあ、さあ、猫ぢや猫ぢやでも、湯灌場踊でもなんでも構はねえ。亡者に魔が魅したやうなところを一つ見せてくれ。おい、和尚。やい、坊主。早くやれ。

法善。はて、慨かはしい。こなたこそまことの惡魔外道ぢや。

長兵衛。惡魔でも外道でもひよつとこでも構はねえ。お巫女に酌をさせて、坊主に踊らせれば、神佛かけあひで、こんな洒落れたことはねえ。さあ、さあ、遣つてくれ。おゝ、お前も手が塞がつてゐるのか。そんなものを持つてゐるから不可ねえ。邪魔なものは思ひ切りよく打捨つてしまへ。

（長兵衛は法善の珠數を奪ひ取りて、これも地に投げ付ける。）

七之助。もし、お前。とんでもない。

（七之助は見かれて支へんとすれば、長兵衛はよろ〳〵しながら見かへる。）

長兵衛。なんだ、なんだ。又出しやばるのか。

七之助。でも、お前。佛樣の罰があたりまする。

長兵衛。へん、罰はこつちで中てゝやるわ。

（長兵衛は七之助をなぐり倒す。おいれは介抱する。上のかたより彌太八は栗毛の馬をひいて出づ。）

彌太八。　おゝ、長兵衛。いゝところで貴様を見つけた。さつきもおやぢに掛合つたが、おれの馬小屋からこの栗毛を引つ張り出したのは貴様に相違あるめえ。

長兵衛。　なんだ。その栗毛をどうしたと云ふのだ。

彌太八。　盗人猛々しいとは貴様のことだ。貴様がこれを盗み出して、となり村の源右衛門に賣つたといふ噂を聞いたから、すぐに行つてみれば案の通りだ。この馬がなくては一日も商賣が出來ねえから、買主の源右衛門にわけを云つて、兎もかくも馬を返して貰つて來たのだ。

長兵衛。　返して貰へばそれでよからう。ほかに云分はねえ筈だ。

彌太八。　馬鹿をいへ。買主が唯で返してくれるか。馬の代の三兩はあとで拂ふ約束にして來たのだ。その代金は貴様が拂へ。

長兵衛。　生馬の眼をぬくとさへ云ふ世のなかに、貴様が間ぬけだから誰かに盗まれたのだ。おれがその尻拭ひをする謂はねえ。

彌太八。　這奴いよ〳〵太い奴だ。もうかうなれば慈悲も容赦もねえ、おやぢには氣の毒だが、貴様を馬泥坊として村役人のところへ引摺つて行くからさう思へ。おゝ、丁度こゝに庄屋殿もゐる。うぬ、逃げようとしても逃がしはしねえぞ。

長兵衛。　なにが怖くつて逃げるものか。おれが盗んだか盗まねえか、その馬に聞いてみろ。それが確な證人だ。（馬の前にゆく。）やい、こん畜生。おれが今、貴様のあたまを一つ撲るから、若しほんたうにおれが盗んだのならば、もうと啼け、もうと啼け。おれがまつたく盗んだのでなければ、ひんと啼け、ひんと啼け。さあ、可いか。みんなもよく聞いてゐろ。（拳をふりあげる。）

彌太八。　（長兵衛の腕をとらへる。）えゝ、好加減に人を馬鹿にするな。馬がもうと啼いてたまるものか。もし、庄屋どの。この通りの横着者、どうぞ御裁判をねがひます。

與茂作。　では、この長兵衛がその馬をぬすんだに相違ないな。

彌太八。　正銘まがひ無しの馬どろばうでござえます。（無理に長兵衛を地に引き据ゑる。）もし嘘だと思召すなら、隣村の源右衛門を證人によんで來ても宜しうござえます。

傳藏。　（この間においれは小鈴にさゝやき、おくろとおかんも誘ひて小鈴を店のなかへ連れ込む。）（進み出づ。）おい、長兵衛さん。さつきから默つて聽いてゐたが、どうもお前がよくないやうだ。なんでも人間は正直が肝心、たとひ一旦は心得ちがひをしても、すなほに白狀して

あやまれば、皆さんも又堪忍してくださると云ふものだ。

（丑五郎と彦松も進み出づ。）

丑五郎。　さうだ、さうだ。わし等もさつきから後の方に退つて聽いてゐたが、みんなお前が惡いやうだ。

彦　松。　第一に和尚樣や巫女どのに亂暴を働いて、珠數をなげ付ける、榊を踏みにじる。あまりに神佛を恐れぬ仕方だ。

七之助。　ほんにさうでござります。わたくしも先刻から、何うなることかとはら〳〵いたして居りました。もし、兄さん。みなさんもあゝして御深切に云つてくだされば……。

おいね。　おまへも強情を張らないで、おとなしくあやまつて下さりませ。

七之助。　馬の代金はわたくしの方から屹と買主に償ひますれば、もしお庄屋樣、どうぞこれも御内分になされてくださりませ。

おいね。　わたくしには唯つた一人の兄さんでござりますれば、馬どろばうの科人になりませぬやうに、どうぞお慈悲を願ひまする。

（二人は土に手をつく。）

與茂作。　（うなづく。）はい、はい、ようござる。かならず心配さつしやるな。亂暴者の兄貴に引きかへて、婿どのと云ひ、妹といひ、揃ひも揃つて正直な人達だ。どうだ、彌太八。このおとなしい二人に免じて、馬どろばうの長兵衛を今度だけは勘辨して遣らうではないか。

彌太八。　なるほど、長兵衛めは憎いが、婿どのや妹には氣の毒だ。買主の方へこの馬の代金さへ素直に償ふなら、わしは勘辨してやります。

七之助。　それは先刻おやぢ樣も云はれました通り、決して御損はかけませぬ。

法　善。　さて〳〵奇特なことぢや。わしも先刻から感心して聽いてゐました。おなじ血をわけた兄妹でも、兄と妹とはこれほどにも違ふものか。それに連添ふ婿どのも天晴れ見あげたものでござるなう。

傳　藏。　兄貴はこの小栗栖の村中でも、蝮のやうな憎まれ者。

丑五郎。　その妹や、妹婿は、佛のやうな正直者。

彦　松。　どうすれば斯うも變るものか。

長兵衛。　（地に坐りしまゝにて呶鳴る。）えゝ、さうぐ〳〵しい藪つ蚊どもだ。なにをがや〳〵云つてゐやあがるのだ。やい、七之助、妹もこゝへ來い。貴樣達はよくも這奴等と一緒になつて、こ

の阿兄さんに馬どろばうの悪名をきせたな。

七之助。　なんでわたくしがそんなことを……。

長兵衛。　いや、さうだ、さうだ。そんならわたくしの兄にかぎつて、決してそんな人間ではございませんと、なぜ立派に云譯をしねえ。賴みもしねえのに出しやばつて、馬の代金は償ひますから何うぞ御勘辨をねがひますと、初めから俺をどろばうと決めてかゝつた挨拶、それが第一に氣に入らねえ。さあ、なんで這奴等と一緒になつて、おれを馬どろばうと決めたのだ。譯を云へ、わけをいへ。

おいね。　でも、お前。見す〳〵證據があるものを……。

長兵衛。　なにが證據だ。誰が證人だ。この馬が口をきいて、長兵衛が盜みましたと云はねえ以上は、誰がなんと云つても水掛論だぞ。

彌太八。　いや、呆れた無法な奴だ。婿どのや妹に免じて、一旦は勘辨して遣らうと思つたが、さう飽まで圖太く出るならば、おれはもう堪忍がならねえぞ。

長兵衛。　堪忍が出來なければ、どうでもしろ。（腕まくりして起ち上る。）堪忍が出來ねえとはこつちで云ふことだ。

傳藏。（遮る。）まあ、待つた、待つた。二口目には腕づくが、ふだんからの悪い癖だ。

長兵衛。　なにを云やあがる。（いきなりに傳藏の持つたる鐵砲を奪ひ取る。）さあ、這奴等。ぐづ〳〵云ふなら腕で來い。矢でも鐵砲でも持つて來いとはこの事だ。

（長兵衛は鐵砲を逆に持ちて振りあぐる。一同はおどろきて思はずあとへ退る。奥の暖簾口より長九郎は珠數を持ちて走り出づ。）

長九郎。　これ、長兵衛。（その腕をとらへて床几の上に押戻す。）さつきから出よう出ようと思ひながら、みなの衆の手前あんまり面目ないので出るにも出られず、今まで小さくなつて隱れてゐた。親の心を察してみろ。この小栗栖の村中でたつた一人のあばれ者、役雜者、不孝者。親のつけた長兵衛といふ名のうへに、蝮といふ結構な綽名をつけられて、自慢さうにのさばりあるく大馬鹿者。けふといふ今日は、もう堪忍も料簡もならぬ。庄屋殿のみる前で、おのれは唯つた今勘當した。

七之助。　もし、おやぢ樣。

長九郎。　えゝ、なんにも云ふな。うみの親が勘當したからは、この村に一時でもゐる事はならぬ。早く行け、どこへでも勝手に出て行け。

長兵衛。　出て行かうと、行くまいと、こつちの勝手だ。おやぢの指圖をうけるものか。

七之助。　（割つて入る。）もし、おやぢ様に向つてそのやうなことを云うてはなりませぬ。

おいね。　わたくし共がお詫をしますから、まあ、默つてゐてくださりませ。

長兵衛。　また始めやあがつた。うるせぇ奴等だ。貴様達のやうな、毛の三本足りねぇ獸物なら知らねえこと、かうして滿足に生きてゐる人間が、耄碌親父の云ふことなんぞを、おとなしくはい〳〵と肯いてゐられるか。積つてみても知れたことだ。

七之助。　まだお前、そんな無法なことを……。

長兵衛　なにが無法だ。そんな親父はこつちが勘當するから、貴様達が負うとも抱くともして、姨捨山へでも連れていけ。おれは總領の跡取様だから、めつたにあの家を動くことではねえ。釜の下の灰までおれの物だ。

長九郎。　總領でも跡取でも、親が勘當した以上、わが家の門ぱたも踏ませぬのが世間一統の習はしだ。さあ行け。立去らぬか。（長兵衛の腕をつかんで引立てる。）

長兵衛。　（振拂ふ。）そんな指圖はおれは受けねぇ。出ていくなら其方で出て行け。

長九郎。　まだそんなことを……。おのれ、どうしてくれう。（長兵衛の襟髮をつかんで珠數にて打つ。）

長兵衛。　（長九郎をつき放す。）いくら親父でもおふくろでも、人の見てゐる前で撲られては、この長兵衛の面が立たねえ。そつちよりも此方がもう勘辨が出來ねえぞ。

長九郎。　（長兵衛は鐵砲をふり上げる。七之助とおいれはあわてゝ支へる。）

七之助。　おのれ、飽までも根性骨の曲つた奴。さあ、打てるものなら打つてみろ。

傳藏。　はて、おやぢ様もあぶなうござります。

長兵衛もその鐵砲をこつちへ戻せ。

（傳藏は鐵砲を取りにかゝるを、長兵衛は一つ撲つ。七之助とおいれはそれを遮らうとする。長九郎は捨臺詞にて長兵衛に詰めよる。長兵衛は支へるおいれを突き倒して、長九郎を鐵砲にて撲つ。長九郎は額に傷きて倒れるに、一同おどろきて駈けよる。おいれと七之助は長九郎を介抱して店のなかに連れ込み、小鈴とおくろとおかんも手傳ひて介抱する。傳藏は長兵衛にむしり付きてその鐵砲を奪はんとす。）

彌太八。　親に傷をつけた奴。引縛れ、ひつくゝれ。

（彌太八、丑五郎、彦松、重助も傳藏に加勢して、長兵衛をとりおさへんとすれば、長兵衛は鐵砲をふり廻してさん〳〵にあばれる。與茂作と法善はあとに退りて見物してゐる。五人を相手にあば

れ疲れて、長兵衛は遂に得物を奪はれ、がつかりして倒れるところを大勢に押伏せらる。重助は店より荒縄を持ち來り、大勢にて長兵衛を縛りあげる。）

與茂作。　お〻、よい、よい。流石のあばれ者も多勢に無勢で、丹波の荒熊のやうに生捕られてしまつた。餘事は扨措いて、現在の親の額に傷をつけるとは、呆れた奴だ。

法　善。　いよ〳〵これは悪魔の所行ぢや。

傳　藏。　いくらお慈悲ぶかい庄屋殿でも、親に傷をつけた不孝者を、もう助けては置かれますまい。

重　助。　御觸れにそむいて、野武士や強盜の眞似をする。それが第一。

彌太八。　その次は馬どろばう。

丑五郎。　その次は兄妹をなぐり、人をなぐり。

彦　松。　あまつさへ現在の親に傷をつける。

與茂作。　こりやどう考へても磔者だ。

重　助。　命が二つあつても足りないくらゐだ。

彌太八。　こりやもういつそ簀巻にして、川へ投げ込んでしまふがよからう。

長兵衛。　さあ、どうとも勝手にしろ。

丑五郎。　役人に引渡すまでもなく、所の法にしたがつて簀巻にするからさう思へ。

（彌太八と傳藏は長兵衛の縄をとり、丑五郎と彦松と重助の三人は奥より簀を持來る。）

長兵衛。　え〻、なにをしやあがるのだ。

彦　松。　なにをするものか。貴樣を川へなげ込んで水葬禮にしてやるのだ。

法　善。　もう是非がない。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

彌太八。　さあ、早くしろ、早くしろ。

（一同は長兵衛をひき倒して簀巻にする。長九郎は額の傷に鉢巻して、七之助とおいねに扶けられて出づ。）

七之助。　お〻、兄さんは簀巻にされて……。

おいね。　こりや情ないことになりましたな。

長九郎。　それもみんな不孝の報だ。貴樣のやうな奴は簀巻にされて、鮒や鯰の餌食になつても親や兄妹は泣かないぞ。おれには七之助といふよい婿どのもある。おいねといふ良い娘もある。貴樣のやうな生れぞこなひは、早く死んでしまふ方が世間の爲だ。

與茂作。　長九郎どのには氣の毒だが、所の法に行ふよりほかはない。さあ、早くその簀巻を川端へ

運んで行かつしやれ。

一同。あい、あい。

（人々は簀巻にしたる長兵衛を運んでゆかうとする時、上のかたより堀尾茂助吉晴、鉢巻、鎧、陣羽織にて、家來三人をつれて出づ。家來の一人は血に染みたる竹槍の穂先を持つ。）

吉晴。こりや、こりや、その方どもに少しくたづねたいことがある。

一同。はい、はい。

（簀巻を下に轉がして、一同はうづくまる。）

吉晴。先づ第一にたづねたいは、この小栗栖村の土民のなかに、竹槍のたぐひをを持出して落武者の路を遮りし者はないか。

重助。はい。それは……。

與茂作。これ。（眼で叱る。）庄屋のわしを差措いて、迂濶にお答へをしてはならぬ。（吉晴に。）いえ、この小栗栖の村中にそんな者は一人もござりませぬ。

吉晴。たしかに無いか。

一同。（口をそろへて。）一人もござりませぬ。

吉晴。さりとは不審。いつはらずに申せ。まつたく竹槍を持出した者はないか。

一同。一人もござりませぬ。

吉晴。はて喃。（首をかしげる。）こりや、その竹槍の穂を……。

家來。はつ。

（家來の一人は竹槍の穂をわたせば、吉晴は他の家來に床几を立てさせ、槍の穂を手に取りて一同にみせる。）

吉晴。その方共も大方は存じて居らうが、きのふの山崎合戰に謀叛人の明智方は總崩れと相成つて、大將の日向守光秀は夜にまぎれて勝龍寺の城を立退き、主從二三騎にて落行く途中、この小栗栖の村はづれの藪際にて不意に槍をつけたる者あり。

一同。おゝ。

吉晴。槍は脇腹に透りしかど、流石は光秀、すぐに太刀をぬいてその槍の穂先を切つて捨て、そのまゝに馬を急がせたれど、急所の痛手にたまり得ず、二三町も駈けぬけて、遂にその場で落馬いたした。

與茂作。では、光秀はその竹槍で……。

吉晴。　むゝ。とても助からぬと覺悟して、光秀は遂に切腹、その亡骸のほとりに落ちてありしは、血に染みたるこの穂先ぢや。竹槍にて突きたるは正しく武士の仕業でない。こゝらの村の百姓どもの猪突槍と見て取つて、扨こそわざ〳〵詮議にまるつたが、どうでも心當りはないか。

與茂作。　いゝえ、そのやうな者は。

一同。　一人もござりませぬ。

吉晴。　どうでも知らぬか。然らば隣村を穿索いたさう。（床几を起つ。）皆もまゐれ。

家來。　はつ。

（吉晴は家來を連れて上の方へ引返さうとする時、簀卷にされたる長兵衛は俄に叫ぶ。）

長兵衛。　もし、もし、お待ち下さりませ。

吉晴。　（見かへる。）誰ぢや。

一同。　え。（顏を見あはせる。）

吉晴。　呼び止めたは何者ぢや。

長兵衛。　（轉げながら叫ぶ。）もし、もし、こゝでござります。

吉晴。　はて、判らぬ。どこで呼ぶのぢや。

長兵衛。　簀卷にされてゐるのでござります。

吉晴。　なに、簀卷にされてゐる……。（初めて長兵衛に眼をつける。）

長兵衛。　ゆうべ明智光秀を竹槍で突いたのはわたくしでござります。

吉晴。　しかと左樣か。

長兵衛。　たしかにわたくしでござります。その證據にはそこらに竹槍の柄が拋り出してある筈でござります。どうぞその穂先と繼ぎあはせて、切口をおあらため下さりませ。

吉晴。　むゝ。

（頤にて指圖すれば、家來どもは其處らを見まはす。）

長兵衛。　さあ、大金儲けになる仕事だ。みんなも手傳つて探してくれ。

（これにて一同も起ち上り、重助は店の前におちたる竹槍を拾ひて家來に渡せば、吉晴は持つたる穂先をその切口にあはせて見る。）

吉晴。　なるほど寸分も違はぬ。切口がしつくり合ふからは確にこれぢや。それ、彼のいましめを解け。

一　同。　はつ。

（人々は長兵衛の簀巻を解く。長兵衛は這ひ起きる。）

吉　晴。　その方の名はなんと申す。

長兵衛。　蝮の長兵衛と申します。

吉　晴。　こりやよく承はれ。百姓どもが野武士の眞似をして、竹槍などをたづさへ出づるは、きびしい御禁制と相成りをれど、これはまた格別ぢや。謀叛の大將明智光秀を突き留めたるは天晴れの功名手柄。おそらく莫大の御褒美を下さるゝであらうぞ。

一　同。　やあ。（顔を見あはせる。）

長兵衛。　ありがたうござります。

吉　晴。　詮議相濟んだれば、それがしはすぐに立歸る。その方もあとより都へまゐれ。かく申すそれがしは羽柴筑前守殿の家來、堀尾茂助吉晴と申すものぢや。わが名をたづねて御陣へまゐれ。

長兵衛。　かしこまりました。では、堀尾樣。

吉　晴。　蝮の長兵衛、かさねて逢はうぞ。

（吉晴は槍の柄と穂とを家來に持たせて行きかゝる。）

長兵衛。　もし、もし、その槍を兩方持つて行かれては何にも證據がなくなります。柄の方だけを置いて行つてくださりませ。

吉　晴。　それも道理。では、戻すぞ。

（槍の柄を長兵衛に戻せば、長兵衛はうけ取る。）

吉　晴。　大將もお待兼であらう。早くまゐれよ。

長兵衛。　すぐにあとから參ります。

（吉晴は家來を連れて向ふに去る。長兵衛は槍を杖にして見送る。）

與茂作。　これ、長兵衛どの。お前はえらい手柄をしなすつたな。

長兵衛。　ちよいとしても先づこんなものだ。實はゆうべこの竹槍を持つて、村はづれの藪際に忍んでゐると、なんでも騎馬武者が三四人、勝龍寺の方から急いで來た。

一　同。　むゝ。（思はず長兵衛のまはりに寄つて來る。）

長兵衛。　眞暗やみでなんにも見當は付かねえが、屹と明智方の落武者に相違ねえと睨んだから、その通るのを待受けて藪の中から突き出すと、一の槍はつき損じて、初めの武士は通りぬけ

てしまつた。つゞいて二の槍を繰り出すと、今度はたしかに手堪へがあつたが、相手も心得のある侍だ。すぐに刀をぬいたと見えて、槍はこの通り、穂先からすつぱと切られてしまつた。

一　同。　むゝ。

長兵衛。　忌々しいとは思つたが、相手は三四人、こつちは一人、とても追つかけて行く元氣はねえから、切られた槍の柄を引つかついで、そのまゝすご〳〵歸つて來たのだ。ところが、人間の運はわからねえ。今あの侍の話を聞けば、おれが突いたのは明智光秀だと云ふことだ。なるほどそれは大變な手柄だ。

彌太八。　羽柴筑前守殿からお召出しになつて、莫大の御褒美を下さるのも無理はない。

重　助。　まつたく人間の運は判らない。人もあらうに明智光秀を打ち留めたとあつては、今度のいくさで一番の大手柄だ。

傳　藏。　これが侍ならば大名にも取立てられるかも知れないが、百姓のこなたでは然うもなるまい。

與茂作。　先づ家屋敷を賜はるか。

丑五郎。　それとも小判か。

彦　松。　田畑か。

法　善。　なんにしても偉い出世ぢや。長兵衛殿。おめでたうござる。（頭を下げる。）

與茂作。　これ、長九郎どの。こなたの息子どのは偉いことになりましたぞ。

長九郎。　はい、はい。まつたく偉いことになりました。（進みよる。）これ、長兵衛。おまへは偉い手柄者だ。その竹槍で明智光秀をつき留めた功によつて、莫大の御褒美を下さるとは、おまへの仕合はせ、わしの仕合はせと云ふものだ。こんな嬉しいことはない。はゝゝゝゝ。

小　鈴。　（すゝみ出づ。）八幡樣の氏子からお前のやうな偉いお人が出るといふ、こんなおめでたいことはござりませぬ。

法　善。　（小鈴を支へる。）はて、長兵衛どのは私の檀家ぢや。わしの檀家からこのやうなお人が出たといふのは、愚僧も鼻が高いやうでござるわ。いや、愚僧ばかりでなく、本尊の阿彌陀如來もさだめて御滿足でござらうぞ。南無阿彌陀佛、なむ阿彌陀佛。

重　助。　そのお祝ひに、こゝであらためて一口召上つてはどうでござりませうな。

長兵衛。　むゝ、前祝ひに一杯のまうか。（床几の上にあぐらを掻く。）

重　助。　はい、はい。唯今すぐに支度をいたします。おくろも娘も、さあ早く手傳つてくれ。

二人。　あい、あい。

（重助等は忙しさうに店に入る。）

輿茂作。　くどくも云ふやうだが、御褒美は家屋敷か、小判か、土地田畑か。なんにしてもめでたいことだ。これ、皆の衆もよろこぶが可い。この小栗栖村に蝮の長兵衛殿といふ偉い長者かひとり出來ましたぞ。いや、長九郎どの。こなたも良い息子殿を持たれて羨ましいなう。

丑五郎。　長九郎どのはよい娘や婿を持つて仕合はせだと思つてゐたが、かうしてみると、やつぱり總領は總領だけのことがある。

彦松。　まつたく兄貴は兄貴だけに、妹や婿どのよりもずつと偉いものだ。

（七之助とおいねは恭々すゝみ出づ。）

七之助。　兄様。このたびの御手柄、お祝ひ申上げまする。

おいね。　おまへ様が御出世あそばして、こんなおめでたいことはございませぬ。

長九郎。　えゝ、おまへ達はそつちへ引込んでゐろ。役にも立たぬ辯に出しやばるな。これ、これ、御亭主。酒の支度はまだ出來ませぬかな。長兵衛はなか〳〵口が奢つてゐるから、酒はなるたけ良いのを吟味して持出してくだされ。

重助。　はい、はい。

（重助とおくろとおかんは酒肴を運び出づ。）

長九郎。　さあ、長兵衛。めでたく祝つて一杯飲んでくれ。はゝ、めでたい、めでたい。

（茶碗を出す。小鈴は長九郎を押退けて進み出づ。）

小鈴。　もし、そのお酒を八幡様の御神酒になぞらへて、わたしがお酌をいたしませう。

長兵衛。　むゝ。やつと素直に酌をしてくれるな。はゝ、ありがてえぞ。

小鈴。　これからはお前の御運長久を毎日神さまに祈りまする。（酌をする。）

長兵衛。　お前のやうな女をお巫女にして、鈴ばかり振らして置くのは惜いものだ。これからは時々にかうして酌をたのむぜ。

小鈴。　（恥づさうに。）はい。

（長兵衛は飲み干して茶碗をだせば、小鈴は再び酌をする。）

法善。　（羨ましさうに。）やつぱり女子は仕合せぢや。

長兵衛。　（茶碗を置く。）いや、ゆつくり飲んではゐられねえ。これからすぐに出かけようか。

長九郎。　善は急げといふこともある。日が長いやうでも京の町までは餘ほどの路程だ。暮れないう

ちに早く行つて來るがよからう。なにか用があるなら、この七之助を供に連れて行つて、遠慮なくどし〳〵使ふがよい。

長兵衛。　なに、邪魔な道連はいつそ居ねえ方が可い。（起ちあがる。）だが、これから京の町まであるくのは些と大儀だ。おい、彌太八。その馬を俺に貸してくれ。

彌太八。　あい、あい。（繋いだる馬を解いてひき出す。）こんな駄馬がお役に立てば仕合せだ。

（長兵衛は竹槍を持ちて馬にのる。）

長九郎。　これ、御褒美を貰つたら、かならず家へ戻つて來てくれよ。

法善。　長兵衛殿の息災延命。

小鈴。　もろ〳〵の禍を攘ひたまへ。

（法善と小鈴は祈る。）

長兵衛。　さあ、日の暮れねえうちに一走りだ。

（長兵衛は馬を早めて向ふへ走り去る。皆々あとを見送る。）

與茂作。　（扇をあげる。）いや、偉い、えらい。やつぱり長兵衛は村一番の男だな。

長九郎。　鳶が鷹を生んだとはこの事でござりませうか。

大正十三年九月十四日印刷
大正十三年九月十五日發行
大正十三年九月十五日發行
綺堂脚本集　第貳卷
（定價金貳圓參拾錢）

著作者　岡本敬二
東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦
東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷者　堀江關武
東京市小石川區諏訪町五十六番地
印刷所　常磐印刷所

著作者檢印

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一・日本橋五一）
（振替口座東京一六一七）
春陽堂

I+4M64

終